



日本聖書神学校 学 報

Japan Biblical Theological Seminary

〒161-0033 東京都新宿区下落合 3-14-16・☎03-3951-1101～2・Email: jbts@jbts.ac.jp

2024 年 12 月 15 日

第 177 号

発行人 神 保 望

【後援会献金口座】

郵便振替:

00110-3-6435

加入者名:

学校法人聖経学園

日本聖書神学校



【巻頭言】

「御子を宿す」

～ルカによる福音書 1 章 26 ～ 38 節

教 授 細井茂徳

今号の内容

巻頭言	1
夏期伝道実習	2
ハラスメント防止講座	3
全校修養会	4
神学校を覚えて祈る集い	4

クリスマス・クランツに火が点されアドベントを迎えました。教会の暦ではここから新たな一年が始まります。諺に「最初が肝心」「始めよければ半ばよし」とあるように、最初が肝要であり、起こりにとった態度や在り方が後々にまで影響するので、よく考え慎重に事を始めなければならないといわれます。その意味でも、私たちがこの期節にルカ福音書におけるイエス・キリストの母マリアのことに思いを寄せるのには意味があるのだと思います。この女性は言うまでもなくクリスマスの重要な人物です。福音書はイエス・キリストの誕生の次第を記すに当たって、ガリラヤという田舎のナザレという名もない村に住む、特に家柄がよいわけでもない、どこにでもいる一人の娘マリアのことから書き始めているのです。

クリスマス物語は、キリスト教信仰にとって極めて重要な箇所、いわば信仰の真髄を示す物語だとも言えます。その重要な物語の書き出しをルカ福音書が母マリアから始めているのは、やはり特別なことだといえるでしょう。それは、マリアがイエス・キリストの母という特別な存在だからということではなく、主イエスの誕生の秘儀に関わることではあるのですが、それ以上にこの母となったマリアの姿にこそ、クリスマスの深い意味を見出すことができるからなのだろうと思います。

ある意味、おとぎ話であるかのように、降誕劇で子どもたちが演じるような物語としてならば面白いけれども、現実にはこんな話はある得ない、そのように感じている方も少なくないのだと思います。でも、本当は私たちもまた“マリア”となるように招かれている、そのように読むことも出来るのだと思います。私たちの中には、老若男女、ハンディキャップや種々累々たる重荷を負っている方もおられます。しかしそれでも私たち一人ひとりに天使は語りかけます。「おめでとう、恵まれた方」と。なぜなら私たちも、マリアのように神の御子を自分の内に

宿すようにと、神の力、聖霊の力が働いているからです。人が御子を宿して産む。このクリスマスの出来事は、他人事ではなく私たち自身のことでもあるのでしょうか。こう言うと、きっとマリアのように「どうして、そんなことがありえましょうか」と思われることでしょう。でも天使は言います、「神にできないことは何一つない」と。その御言葉はまことに真実で、これは何も荒唐無稽な話をしているのではなく、真剣にクリスマスの奥義を授けているのです。私たちはマリアのように平凡な人間です。否、おそらく一部の人が敬っているマリア像のような清純な人間ですらないでしょう。それでも、神は私たちを選び、礼拝に（神学校に）集めてくださり、私たちに聖霊と神の言葉を与えておられます。私たちの内に、御子イエスを宿らせたいからです。

おそらくマリアは自分の身に降りかかった出来事に喜びのかけらも感じられなかったことでしょう。むしろ、とんでもない重荷を神から背負わされたという事態だったのだらうと想像します。しかしマリアは、何らはっきりとした確信があったわけでもなく、また納得出来る説明を受けたのでもなく、にもかかわらず“Let it be to me according to your word. (ESV) お言葉どおり、この身になりますように”と、あるがままを神からのものとして信仰的な事実を受け入れようとするのです。この“be”は深遠な言葉です。その中で、マリアは神を喜び讃えています。ここでの喜びこそ、本当のクリスマスの喜びの境地に達しているのです。

マリアのように従順に答え、神の願いと導きを受け入れるなら、信仰的な意味で私たちもまた主イエスを身ごもるのです。御使いの告げた「主があなたと共におられる」「恐れることはない」との御言葉に支えられながら、私たちもまたパウロのごとく「キリストが私の内に生きておられる」（ガラテヤ 2 章 20 節）との信仰を持って新たな年を歩み出せるのです。

夏期伝道実習

● 勿来教会・東北教区青年ワークキャンプ 内田弥生（3 年）

勿来教会の佐野治牧師の指導のもとで、10 日間に及ぶ東北の地での研修は、東北の現状を目の当たりにして東日本大震災の経験者しかわからない苦悩と、またその環境を取り囲む各教会の教派を超えた支え合う祈りの現状を知ることができ、貴重な体験となりました。いわき市は人口 33 - 34 万人。教会は 24 あります。勿来教会がある地域には、新しい建物が多くあり、これらは東日本大震災による原発被害を受けた双葉地域の方々が移住されています。教会員は 300 人から 500 人だ

けなので 1% にも満たないキリスト者人口です。滞在中に関東で大きな地震がありましたが、テレビの地震のテロップが流れているのを見て、フラッシュバックを起こされ足の震えが止まらないという信徒さんからの連絡を受けました。しばらくは動けなくなるとも珍しくないというお話を伺いました。まだまだ東日本大震災は終わっていないのです。放射能の影響もまだあると伺いました。

特に印象深かったのは磐城教会の私と同年代の高橋優美子牧師、中心的な

まとめ役を務められるグローバルミッションチャペルの森章牧師でした。いわき市全体で、教派を超えた助け合いの象徴がクリスマスの「いわき市民クリスマス」です。去年は 300 人の参加があり、60 数箇所の教会や事業所が協賛しており、一年かけて準備されます。後半は猪苗代教会で行われた東北教区夏季中高生・青年ワークキャンプに参加できました。猪苗代教会の新田恭平牧師は 30 代！の若さです。30 名近い若者達との交流は、新鮮でよい締めくくりとなりました。

● 沖縄の人たちとの出会いの中で 海野 博（3 年）

私は 8 月夏期伝道実習として、沖縄の教会に行き、牧師・教会員の方々と、教会の伝道・牧会・運営や地域での実践を直接学んだ。7 月 31 日～8 月 15 日宮古島伝道所、8 月 15 日～8 月 22 日志真志伝道所、8 月 23 日～8 月 29 日首里教会の日程での実習をさせていただいた。

宮古島伝道所で植木の剪定や畑づくり、ダンス教室、自衛隊基地前での抗議活動などと体験した。8 月 15 日、沖縄島にわたり、ぎのわんセミナーハウスに宿泊し、同じ建物 2 階にある望

月智牧師の牧会する志真志伝道所で実習に入った。日曜日は、子どもたちにマタイによる福音書 7 章 7 節「求めなさい。そうすれば与えられる。…」のみ言葉を厚紙で作った扉・魚・蛇・石を使ってお話をし、大人の人たちには「わたしがどうして神学校に進む決断をしたか」を含めた奨励を真剣に聞いてくださった。8 月 23 日は首里教会にて、流しそうめん大会に参加し、小学生の子どもたちが、とても喜んでそうめんをすくっていて、大人たちも一緒に喜んだ。その後、針金と毛糸で作っ

た大きなシャボン玉をつくる道具で、子どもたちも、はしゃぎながら、シャボン玉を作っては追いかけて、一緒に楽しんだ。首里城も見学し、地下に日本軍の地下壕が掘られている跡を外から見、上地武牧師から説明を受けた。沖縄の土はサンゴ礁が隆起してできていて、硬い石灰岩が出てくるので、戦争当時、人が手で掘るには、相当苦労したことが想像できた。

この夏、沖縄の地で日本人としての自らの罪に向き合う日々を与えられ心から感謝である。

● 田尻教会

鷲谷義和（3 年）

私にとって今回の夏期伝道実習は実に素晴らしい体験でした。8 月 15～19 日、宮城県にある日本基督教団田尻教会へ遣わされ、五日間、友川榮先生（31 期生）と寝食を共にさせて頂く中で、牧師として生きるとはどういうことなのか、実地で学ばせて頂きました。

まず友川先生は聖書を深く愛しておられます。そして毎日、欠かすことなく聖書の学びを続けておられます。ある朝など、すでに朝食の準備ができていたのに、一向に先生が書斎から出て来られません。30 分経っても来ら

れないので、ノックして入室すると、「ああ、ビックリした」と声を上げ、もう完全に聖書に没頭して時間を忘れていたのです。ある時は、目をキラキラ輝かせて「鷲谷君、パウロはローマ書のこの箇所で〇〇〇〇と言っているよ。いやあ、すごいねえ」と、感動しながら語るのです。

また友川先生は人々を深く愛しておられます。ご家族を愛し、教会員一人一人を愛し、地域の人々を愛しておられます。道を歩いていても、通りかかる学生たちに声をかけ、近隣で脱サラ



して開業したパン屋さんを応援して毎日のようにパンを買い、いつも笑顔を絶やしません。これまで大変なご苦労を負って来られたにもかかわらず、友川先生の内にはいつも喜びが溢れていました。私もこのような牧師になりたい、と心底思われた五日間でした。

ハラスメント防止講座 — 全校共通総合演習 —

2 年 瀬尾真結

本年度のハラスメント防止講座は、日本バプテスト同盟駒込平和教会の渡邊さゆり先生を講師にお招きして行われました。牧師が起こしうるハラスメントについて、基本的なところから具体例に至るまで様々なことを知る、非常に学び多き時となりました。

中でも特に印象深かったことのひとつは「マイクロアグレッション」についてです。これは“日常の中に存在する、他人を傷付ける意図はないが結果として傷付けてしまうような言動”を指し、本講座の中でもいくつか具体例が挙げられましたが、特に印象に残ったのは、耳が遠くなったお年寄りに対する声掛けについてです。私たちは通常、耳が聞こえにくい方に対しては大きな声でゆっくり話すことを心がけますが、その際、語彙まで簡単にしてしまうことがあるようで、これがマイクロアグレッションに当たるということです。これについては、意識していなかったのが本当にハッとさせられました。

また、「ハラスメントを防止するた

めに日々何をすれば良いか」についても学びました。先生によれば、そもそもハラスメントとは差別構造の中で生じることから、これを防止するためには「差別について常に話題にし、共同体全体での反差別の意識化を行う」ことがまず必要であり、その上で、共同体内で常に「誰でもハラスメント加害者になりうる」ことを話題にしつつ、何かあったときのために「相談窓口と外部団体への相談ルートを確保する」ことが重要なのだそうです。なるほど確かに、自身の教会生活を思い返してみても、教会内全体でハラスメントに関する意識が周知徹底されていた印象はありません。しかしその一方で、教会、特にプロテスタントの教会は、教会というある種の「閉鎖的空間」の中で「その教会独自の文化を形成」している「宗教団体」です。それ故に、時に教会とは、その教会が積み上げてきた歴史や文化、あるいは個々人の信仰が、誰かの嘆きや心の傷を無視してしまう、そういった危険性を孕んだ場所

でもあります。普段は大切に守っていきべき「その教会らしさ」や「主に対する敬虔な心」が、歪な「当たり前」を形成してしまい、その結果誰かを傷付けてしまう可能性を、私たちは常に意識していかなければならないと、強く感じました。

教会というひとつのコミュニティにおいて、牧師という存在は、信徒の方々から「先生」と呼ばれ、また役員会や教会総会などでは議長を務め、宗教法人の代表者として登記もされる、といったように、どうしても指導者の・中心的立場として見られがちです。そうであるからこそ、本講座は、そのような関係性の差異を利用して誰かを傷付けることのないよう自らを内省し戒める良い機会となりました。このような機会を与えてくださった主に心から感謝し、改めて「上に立つ人は、仕える者のようになりなさい」（ルカ 22：26）という主の言葉を思い起こしつつ、これからも日々の学びに励んで参りたいと思います。

全校修養会 環境正義に向かう霊性—エコロジカルな視点で聖書を読む— 教授 小林祥人

今年度の全校修養会は、10月25・26日に武蔵嵐山（埼玉県）の国立女性教育会館にて行われました。いわゆる「コロナ禍」の最中には校内で行っていた修養会ですが、今年久しぶりに一泊二日のスケジュールを組むことができました。なお、私・小林にとってはこの形式は初めてでした。部分参加も含め、全員で21名の集いでした。さて、今回のテーマは「環境正義に向かう霊性—エコロジカルな視点で聖書を読む」とし、その講師に藤原佐和子さんをお迎えすることができました。藤原さんは今年出版された『エコロジカル聖書解釈の手引き』（キリスト新聞社）の共著者でもあり、エコロジカルが、なぜ「正義」なのか、信仰や召

命との関係はどうであるかという問題提起を中心とし、「被造世界」についての理解、また「気候的正義とは」などについて、エコ・フェミニズムの問題をも織り交ぜながら、そしてWCCやCCAの取り組みの活動を歴史的にふりかえりつつの啓発的なお話をいただきました。わたしたちにとってそれがたいへん身近であるこの問題についての、世界と日本のキリスト教会の歩みを学ぶことができました。

二日目は、まず早天祈祷会で、一年生の西宏海神学生による証が語られました。そのあとで前日の講演からの学びを振り返りつつ、それぞれで自由に展開してもらうことができました。それに先立って水谷教授と私で分担し、



それぞれ新旧約聖書の「環境正義」を問題提起しうる聖書箇所についてレクチャーを行なったあとで、神学生の中から三人がファシリテーターとなり、三つのグループに分かれた仲間たちから意見やアイデアをいろいろと引き出してくれました。そこには教会としての歩み・キリスト者の姿勢・聖書の読み方など、いわゆる「教会的」な発言はもちろんですが、もっとこの世的



な意味での、どんなことがわたしたちにとっての「環境正義としての取り組み」であるのが、たくさん提起されたと感じました。ポリ袋・夜中まで明るい街・人間中心に動いていく世界・なにもできていないわたしたち—わたしたちの世俗的な普通の生活。敢えて

まとめ・結論は出しませんでした、これ以降の学び、いずれ出かけていく宣教の現場の上に活かされるようなものとなるのが期待されます。そして細井教授の司式による閉会礼拝では、授業で訳出した Season of Creation をリタニー形式で心を合わせて祈り、修養会を終えました。

これに参加しながら、E.G・マキーゾの賛美歌「美しい大地は」やD・ゼレ提唱の「創造の神学」が日本に紹介された 30 年前を思い出しました。あの頃レイチェル・カーソンの諸著作も相次いで日本語になりました。しかし、

この間教会は？そして自分は？と考えてしまいます。「一人ひとりにできること」と、よく言われます。しかし「できること」をやってきた自分であったか、それを伝える宣教であったか、問い直しているところです。



神学校を覚えて祈る集い—テゼの歌による黙想と祈り 教務部長代行 荒瀬牧彦

これまでオープンキャンパスという名称で、神学講演などを企画して、地域や諸教会を含めた多くの方々に神学校に足を踏み入れて頂くという行事が、学生自治会主導で行われてきました。今年は、後援会からの「神学校日（10 月第 2 主日）」に合わせて、神学校の存在意義をアピールし、支援を呼びかける集会を」という提案を受け、オープンキャンパスの性格を持ちつつ、神学校のために祈る集いを集会を、学校主導で準備することとしました。

祈りを中心に据えた集いとする、多くの方に関心を持って頂くために何か大きな特色を持たせること、出席する神学生たちにとっても有意義な経験となること、という三つの条件から考えた時、エキュメニカルな修道会である「テゼ共同体」の歌、そしてその祈りのスタイルを用いた時間をプログラムの中心に据えることとしました。そこで、テゼ共同体に魅了されて

幾度も現地に祈りに行かれ、隠退まで牧会しておられた教会でもテゼの集会を主宰し、数年前には『テゼ共同体と出会う』という著書も出された上垣勝先生に指導をお願いし、全面的な協力を頂くことができました。音楽面では、教会音楽の授業でお世話になっている鈴木敦子さんにお手伝いをお願いすることができました。

当日は、第一部が神学校紹介タイムで、神保望校長、菊池公平後援会長、瀬尾真結神学生にそれぞれ本校の特色や日本伝道のための本校の存在意義や支援の必要性、また神学校生活の実践について話して頂きました。続く第二部では、上垣先生にテゼに関する簡単な講義をして頂き、その後の時間で歌うことになる歌を練習する時間を持ちました。

そしていよいよ約 1 時間の「テゼの歌による黙想と祈り」です。礼拝堂の前方 3 分の 1 は長椅子を片付け、床に座るスペースを設けました。テゼの集いでは、多くのキャンドルを並べる、イコンを置く、緑の葉を飾るなど視覚的な要素も重視しますが、上垣先生のご指導と職員たちの協力によって、目的にふさわしい礼拝空間を設えることができました。「すべての人よ、主をたたえよ」、「主よ、あなたは命の泉」、



「恐れるな、煩うな」など 9 曲を、テゼでそうするように何度も何度も繰り返し、全身に言葉を染込ませるようにして歌いました。ヨハネ福音書 7 章 37-39 節の三つの言語での朗読の後、約 10 分に及ぶ沈黙の時間が守られました。これは通常の私たちの礼拝ではないような長さですが、「密度の濃い神との交わりとなったせい、全く長さを感じなかった」という感想を参加者から後で聞きました。祈りの時間の後には 5 グループに分かれての「分かち合い」の時を持ち、この日初めて出会った人たちと感想を語り合うことで一層この夜の経験を深められたようです。

外部から来た方々から良い感想を頂き、またテゼの集いが初体験という人も多かった神学生たちから「深い感銘を受けた」、「癒された」といった声を聞くことができ、感謝しております。参加者は 59 名でした。

